

1 研究主題

すべての子どもが学ぶ喜びをもつ授業づくり ～「かかわる」「学びを深める」子どもの育成を目指して～

2 研究実践の内容

- (1) 現行の学習指導要領において、児童の資質・能力を伸長させるために「主体的・対話的で深い学び」の実現が求められている。当校では、まず國學院大学の田村学先生の提唱する「深い学び」の型について理解を深める。その上で、子どもの学びが深まった姿を明確に想定し、そこに向けたICTを含めた手立てを講じる。その姿に到達したか、また手立てが機能したかについて検証していく。
- (2) 「深い学び」を実現するために、授業改革を推進する。新潟市の授業づくりの根幹となる「学習課題の設定」「学習のまとめの構築」「振り返りの位置付け」、さらに新たに加わった「アウトプット」を位置付けた授業を展開していく。昨年度まで当校では、「学習課題の設定」を「質の高い問いの発生」、「振り返りの位置付け」を「振り返り作文の位置付け」、「アウトプット」を「かかわり」として、学習過程への位置付けに努めてきた。本研究においても、引き続き、児童の学習意欲を喚起する「問い」を発生させることを大切に、児童間で情報を活発にアウトプットし合う「かかわり」を効果的に位置付けて、児童が学ぶ喜びをもつ授業にしていく。
- (3) 国語・算数・その他の教科の3つの教科グループを構成する。その上で、各グループのリーダーを決定し、事前事後の検討等の授業研修の運営を依頼する。それにより、授業づくりに取り組む教職員の協働性を高める。さらに、本研究で蓄積した知見を、連続授業研修会を通して、校外に広く発信していく。

3 実践事例及びその成果と課題

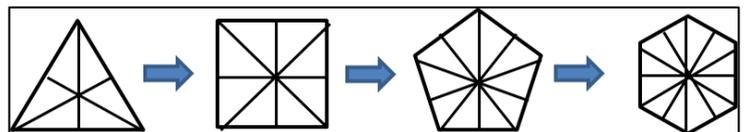
(1)連続授業研修会(10月1日:オンラインで実施)

①研修会の概要

質の高い問いと「学びを深める」ための手立てが、子どもの「学びの深まり」に有効であったかを2つの授業実践を通して検討した。また、オンラインで田村学先生から授業参観していただき、「学びの深まり」の具体や評価について、御指導をいただいた。

②公開授業の実際(6年算数「対称」の授業から)

授業では、線対称や点対称について、その特徴やどのような図形かという知識をもつ子どもたちに、右のような順で図形を示した。



その後、それぞれについて「線対称」または「線対称かつ点対称」を確認していった。ここで、何人かの子どもたちから、「奇数と偶数」という声が上がった。何人かの子どもはその規則性に気付いたが、まだ気付かない子どもも見られた。そこで、「正多角形が線対称にも点対称にもなる時は、どんな時かな。」という「問い」を学習課題として設定した。さらに、提示した図形を2つのグループに分け、その共通点や相違点について話し合う学習を行った。話し合うことや、ペアやグループなどで考えを交流させたことで、対称の規則性やその根拠をとらえさせることができた。

③研究主題にかかわる成果と課題

本時の授業では、三角形→六角形の順で出すこと、すなわち、条件変更を取り入れることで、子どもたちを「学びの深まり」に導く足がかりとなる「問い」を生み出すことができた。また、2種類の図形に分類して示したことで、「比較」という思考が働き、規則性やその根拠を考えることにつながった。また、田村先生の御指導でも、「性質により図形を分類し、比較・検証することで、子どもたちは、対称性・辺・頂点・対称の軸・偶数・奇数など、複数の知識を構造化し、深い学びへと至っていた。」と指摘があった。このことから、条件変更により子どもたちの課題意識を高め多様な考えを引き出すこと、出された考えを特定の視点で比較させることで「学びの深まり」に導くことができる可能性を見出すことができた。

しかし、田村先生から「本時のめあて」「目指す深い学びの姿」「本時の評価」の書きぶりが、「思考・判断」と「知識・理解」が混在していると指摘があった。「学びの深まり」へ向かうためには、目指す姿や資質・能力を具体化し、それを生み出す手立てやそれを見取る評価を一貫させていくことが今後の課題であることが明らかになった。

(2)授業づくり研修会(12月3日:オンラインで実施)

①概要

連続授業研修会で検討することができなかった教科について、公開授業を通して「学びの深まり」の具体やそのための手立ての有効性を検討した。また、連続研修会で明らかになった「学びの深まり」のために有効な手立てや学習過程、評価のあり方も授業公開を通して検討した。県内外から、150名近い参加者を得た。

②公開授業の実際(2年国語「スーホの白い馬」の授業から)

これまでの物語の学習から、子どもたちは「物語では、中心人物の変容が描かれること」をつかんでいた。しかし、本時の段階では、「スーホの白い馬」で、中心人物スーホがどのように変容しているかはまだ捉えられていなかった。

本時では、「気持ちメーター」に示した子どもたちが考えるスーホの心情にずれがあることから問いを生み出した。この問いをはっきりさせたいという思いを原動力として、これまでの学習を通して身に付けてきた物語文の読み方を中心とした知識・技能をベースにしながらか、中心人物の変容を捉えるために山場場面に着目して学習を進めた。

子どもたちは、他の場面のキーセンテンス(白馬との約束)とつないで読んだり、対人物である白馬との関係を読んだり、時系列に中心人物の気持ちを整理して捉えたりするなどの知識・技能を結び付けることで、中心人物スーホの変容を確かに捉えることができた。



③研究主題にかかわる成果と課題

中心人物の変容を捉えるためには、読むことの基本となる「正しく音読する」「言葉の意味を捉える」「叙述に着目する」などの知識・技能が結び付いている必要がある。

また、物語の内容を正しく捉えるための基本となる「時・場・人物を読む」「場面を読む」「場面の出来事を読む」などの知識・技能が結び付いていることも必要である。

それらを自覚的にさせたり手応えを感じさせたりすることで「主体性」に繋がることを御教示いただきました。思考力・判断力・表現力や学びに向かう人間性等も、知識・技能を結び付けるという文脈で考えれば、明確になるということを一層明らかにしていただいた。

さらに、「学びの深まり」の評価については、文字言語を用いて行い長く書くことが基本であるというお話があった。当校で行っている「振り返り作文」が子どもの見取りには有効であるということをお指摘いただいた。今後、キーワードを繋げて書かせたり視点やターゲットを変えて書かせたりするなど、書かせ方を工夫することで、期待する資質・能力を見取れる可能性があることもお示しいただいた。授業のねらいとそれに合わせた振り返り作文の書かせ方は来年度に生かすべき課題と言える。

パネルディスカッションや御講演を通して、今年度の研究を評価していただき、また来年度に向けた方向性も明確にしていただくことができた。

現行の学習指導要領において、田村先生の「深い学び」については、新潟県内はもとより全国の学校の先生方の最も関心が高い内容である。「深い学び」に正面から取り組んだ授業実践と関連づけながらお話いただいた講演会はとても有意義であった。講演後、多くの参加者から肯定的な感想が届けられた。以下に抜粋する。

【参加者の感想】

- 大変勉強になりました。「資質・能力をつけること」と「主体的・対話的で深い学び」との繋がりがよく分かりました。日々の授業の中で何を意識し、どうねらいに向かっていくべきかを授業者が明確に持つことの大切さを実感できました。また、評価基準の具体的な立て方もよく分かりました。この手法でいけば、子どもの評価だけでなく、授業者が子どもにつけるべき資質・能力が明確になりその働き掛けを具体的にしながら、日々の授業を充実できると思います。本校の研究に参考にさせていただきながら来年の研究を推進していきたいと思います。
- 深い学びと資質・能力の関係について、改めて整理できたような気がします。型はあくまで構想であり、あとは子どもの実態に合わせて柔軟に変えていくことが大切だという言葉に共感しました。子どもを置き去りにした授業にならないよう、気を付けながら、子どもとともに深い学びをつくっていきたいと思いました。その積み重ねが資質・能力の育成となるよう、構想していきたいです。

4 まとめ

授業研究を通して、学習意欲を喚起する問いを一人一人の児童にいかにも強くもたせるのか、さらに児童の考えを ICT 機器を活用しながら、いかにアウトプットさせ、交流させていくのかを探ってきた。また、それによる学びの深まりも明らかにしてきた。

今年度の研究の課題は、以下の通りである。

- 書かせ方を工夫することで、期待する資質・能力を見取れることが分かってきた。授業のねらいとそれに合わせた振り返り作文の書かせ方をさらに改善していくこと。
- さらに「学びの深まり」へ向かうためには、目指す姿や資質・能力を具体化し、それを生み出す手立てや見取る評価と一貫させていく必要があること。

授業づくり研修会には、新潟市内の教員だけでなく、新潟県内外からのべ 400 人の教員から参加していただいた。本プロジェクトでねらっていた、新潟市の授業づくりをベースとした当校の授業改善に関する知見の発信を、確実にできたにとらえている。